



Title	心理的变化を表す構文における下位レベルの構文の意味的特性について
Author(s)	中尾, 朋子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2016, 2015, p. 41-50
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57314
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中尾朋子

1. はじめに

英語の心理的变化を表す表現には (1) に挙げるように、(2) の物理的な移動事態を表す使役移動構文と同様の [NP V NP PP] の形式で、「ある感情を生じさせる」という意味を表すものがある。この表現は、目的語に感情名詞をとり、into 句 では経験者を示す名詞句をとる。また、主語の性質は (1a, b) のように感情を引き起こす原因を表す場合と (1b) のように動作主を表す場合が確認できる。また、この表現 **strike** を伴う場合、生起する感情名詞は、主に **fear** または **terror** など少数に限られている。そのため、(1) の事例は、辞書によってはイディオムとして扱われている。

- (1) a. Sancho's death at the age of 34 **struck fear into** the hearts of his followers, many of whom fled. (BNC)
b. Believe me, all those cannon, mortars and volley guns should **strike fear into** the heart of the enemy. (BNC)
c. He seeks to **strike terror into** the hearts of white Southerners, [...]. (COCA)
- (2) a. The man threw the bag into his car.
b. They pushed the desk out of the room.

筆者は、Nakao (2015) において、(1a, b) のような、感情名詞 **fear** を特定したスキーマ [V [FEAR] into NP] を構文として、その特性を考察してきた。動詞の特性に注目すると、**strike** の使用が多くみられ、感情の発生様態について「突然生じる」という意味を表すパターンとなっている。(3b) のように、反対語である **gradually** との共起性は容認性が低いことからこのことは明らかである。(4b) でみられるように働きかけの「強さ」に関しても指定がみられ、**weakly** での修飾はできないことがわかる (cf. Nakao 2015)。

- (3) a. The man struck fear into his enemy **suddenly**.
b. *The man struck fear **gradually** into his enemy.
- (4) a. The man struck fear into his enemy **intensely**.
b. *The man struck fear into his enemy **weakly**.

これまでの分析をふまえ、本稿では、(1) にみられるような、**strike** [Emotion Noun] into NP パターンを一つの「構文」としてその特性を考察する。そもそも、OED を参照すると、**strike** [Emotion Noun] into NP パターンは、**strike** の用法の一つに記載されているが、特に共起す

* 本稿を執筆するにあたり、由本陽子先生、早瀬尚子先生に有益なご意見・アドバイスをいただいた。感謝の意を表したい。

¹ 本稿は Nakao (2015) の 4 章と 5 章の一部を修正・補筆したものである。

る感情名詞の性質についての記述はされていない。しかし、実際に使用される感情名詞は、(5a) に示すように、**fear** など否定的な感情を表す名詞と生起しやすく、(5b) のように、肯定的な感情を表す語とは生起しにくいとみられる。そこで、**strike [Emotion Noun] into NP** パターンでの感情名詞の共起性を分析していくことで、構文としての特性を探ってみたい。

(5) a. The man struck {fear/terror/awe/trepidation/despair} into his followers.

b. *The man struck {confidence/enthusiasm/respect} into his followers.

(Nakao 2015)

本稿の構成は、2 節で、先行研究および下位レベルの構文の認定と役割について概観する。3 節では、**strike [Emotion Noun] into NP** 構文をコーパスで検索した事例を、典型的なパターンと非典型的なパターンに分類し、頻出する感情名詞 **fear** を目的語とするパターンの役割と非典型的な感情名詞を伴うパターンにおける主語と感情名詞との意味的な適合関係について論じる。4 節では、主語と目的語の関係について、一般的な使役移動構文と **strike [Emotion Noun] into NP** との共通性を捉え、5 節は、本稿の結語とする。

2. 下位レベルの構文の認定と役割

構文文法 (Construction Grammar) のアプローチでは、様々な節や句の単位を「構文」と認め、議論されている。Goldberg (1995)で提示された構文の理念を基盤にした研究では、構文のスキーマ性は、それぞれの特性によって捉え方は一定ではない。とりわけ、下位レベルの具体的な語が組み込まれたレベルで構文と認定すべきであると論じられている研究がある (Croft 2003, 2012; Iwata 2008)。Croft (2003) は、動詞の詳細な意味と結びつけた下位レベルの構文の特性によって現象に説明を与えられると提案する。同様に、Croft (2012) では、とりわけ動詞が示すイベントの指定と構文の基本的な意味と合致することによって事例が認可されると論じており、この具体的な動詞を限定した事例に近いレベルの構文を **verb-specific constructions** と設定する。つまり、**verb-specific constructions** は一般的な特性や制約と個々の動詞の表す事態が合致した意味を表すものであって、構文と語の両方の性質を持ち合わせているということになる。構文のスキーマ構成における下位レベルの構文の捉え方は、認知言語学における重要な方向性である、用法基盤モデル (Usage-Based Model: e.g., Bybee 2010) の観点と同じものである。いくつかの用法・事例の頻度と関係性によってスキーマが抽出され、そのスキーマから段階的に抽象的なレベルの構文が形成されているという考えである。

さらに、Iwata (2008) は、Goldberg の構文主義を保持しながらも構文における語の意味の関わりを大きく認めていくべきだという立場で、明確に下位レベルの構文である **verb-specific constructions** の役割を位置づけ、語と構文の相互作用に関して体系的に議論し、構文の重要性と語彙の役割を認める語彙・構文文法的な説明 (a lexical-constructional account) を与えている。

このような階層的な構文のスキーマ構成における下位レベルの構文の重要性を認めると、

strike fear into NP 構文 ((1a, b) でみられるパターン) については、動詞のみを指定した *verb-specific constructions* よりも下位のレベルで位置づけられ、名詞も含めたレベルで適切に特性を捉えることができることを筆者は提案する (Nakao 2015)。*strike fear into NP* 構文にみられる突然性、強さという心理用法における *strike* の意味要素の共通性から他の打撃動詞の拡張用法が捉えられ、意味的相互作用によって *shoot* や *beat* で応用した構文事例として認可することができる。下位レベルにおいても *strike fear into NP* 構文を中心として、構文カテゴリーを取り出すことができる。また、使役移動構文と同じ形式 [NP V NP PP] であることから上位レベルの使役移動構文との関係も捉えられる。たとえば、使役移動構文の目的語に生起する移動物は その移動の過程において状態変化を含意する場合、経路を特定することできない (Goldberg 1995)。つまり、(6a) のように状態変化を伴う移動は容認されない。この制約と関連づけると、心理的な変化を表す (7) では、関連して *surprise* や *startle* のような反応的な変化を示す感情名詞の場合は共起できず、持続的な感情を表す名詞である *fear/terror* などは共起可能である。

(6) a. *The man broke the chair into the room.

b. The man pushed the chair into the room.

(7) *The man struck {a startle/a surprise} into his neighborhoods.

以上、下位レベルの構文を設定する意義は、詳細な語彙の意味も加味して特異な構文パターンを詳細に記述することが可能であることと、上位の一般的な特性との関係性を捉えられるということから有効であるといえる。前節で示した「突然強く生じる」という発生様態の特性と合わせて、下位レベルの構文 *strike [Emotion Noun] into NP* を以下の (8) のように、構文の形式と意味を示すことができる。

(8) Syn: NP_X strike [Emotion Noun] into NP_Y

Sem: X causes Y to feel (typically) continuous [Emotion Noun] intensely and suddenly.

X= Cause/Agent, Y= Experiencer

本稿においては、感情名詞の具体的な共起性について (8) よりもさらに詳細な分析を与えるため、同様の構文文法的アプローチから *strike [Emotion Noun] into NP* 構文の意味的な特性について考察する。また、個別の用法の分析だけでなく、上位レベルの一般的な使役移動構文の意味との関連性にも着目していきたい。

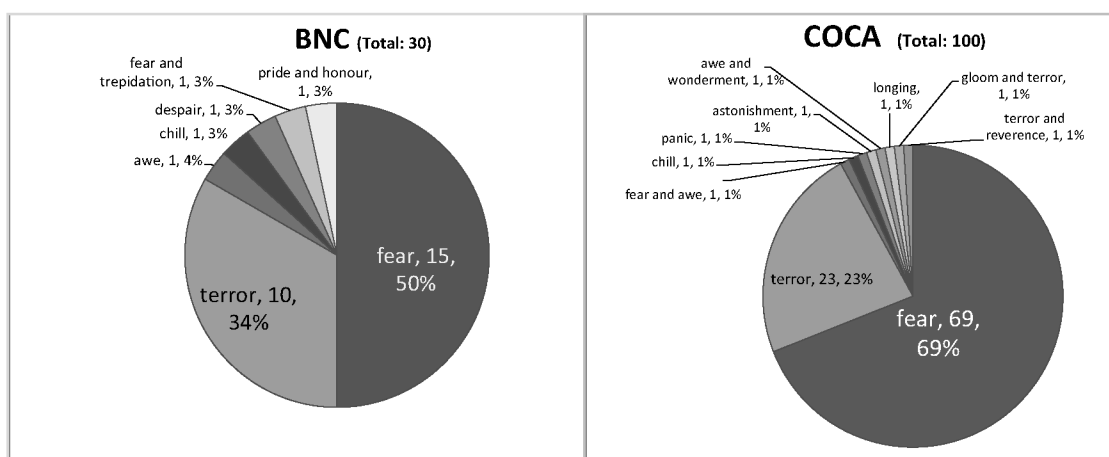
3. コーパスでみられる *strike [Emotion Noun] into NP* に生起する感情名詞

3.1 典型的な目的語 *fear*

まず、2つのコーパス (BNC, COCA) にて *strike [Emotion Noun] into NP* 構文の生起例を検索すると、*fear* の生起例が最も多く *terror* が次に多くみられるという同じ傾向を確認できる(図 1, 2 参照)。このような頻出する連語関係からイディオム表現として扱われていることが窺える。また、この構文において *fear* が最頻出する一つの理由として、恐怖を表す一般性の高い意味を表す語であることが関係しているだろう。そのため、他の *fear* と類似

する意味を表す感情名詞の共起は、使用頻度の高い **fear** の共起例が中心的な機能によって拡張されて使用されていることが分析できる。つまり、*strike fear into NP* 構文 が典型的な構文事例として定着度が高いため、それを基にして新たなメンバーを増やす役割を果たしていることが捉えられる (cf. Nakao 2015)。(9) に挙げられる事例は、それぞれ **fear** を基本的な意味として類似する名詞 **panic**, **trepidation**, **awe** が生起するものである。

図 1. BNC と COCA における *strike [Emotion Noun] into NP* 構文に生起する感情名詞の分布



- (9) a. The missiles make ideal weapons for terrorists. They're small, easy to obscure and can be launched in a matter of seconds. But perhaps more importantly, they have the ability to *strike panic into* millions of people. (COCA)
- b. There is no procedure that *strikes more fear and trepidation into* the hearts of the ignorant and misinformed than the lumbar puncture. (BNC)
- c. Carefully grubbied white breeches tied below the knee, open-necked shirt and spotted scarf tied untidily, lace up boots, he *struck as much awe into* the onlookers as would Sikes himself. (BNC)

次に、発生様態の意味も、*strike fear into NP* 構文の特性と同様に、突然、経験者に強く感情が生じるため、(10) のように、「強さ」の反対語 **weakly** や「突然性」の反対語 **gradually** との共起は、意味的に適合しないため、それぞれ容認できない。このことから、*strike fear into NP* 構文の特性と共通していることがわかる。

- (10) a. *The man weakly struck {awe/panic} into us.
 b. *The man struck {awe/panic} into us gradually.

さらに、(11) の **despair** のように **fear** の類義語ではない、否定的な感情語の場合も 1 例みられる。

- (11) No one cares to remember whether the author of the most fascinating allegory that ever struck *despair* into the souls of imitators was a Dissenter.’ (BNC)

このように、*strike [Emotion Noun] into NP* パターンでは典型的には *fear* の共起パターンが定着しており、中心的な役割を果たすため、その類似的な感情を表す名詞との共起パターンへと使用が拡張されているとわかる。つまり、具体的な語の使用によって、構文のカテゴリとしてのもたまりを捉えられる。一方、*fear* を中心してまとめられる構文事例とは異なり、典型例とはいえない肯定的な感情名詞も目的語としてあらわれることも少数ではあるが存在する。次節では、非典型的な感情名詞の共起例に焦点をあてる。

3.2 非典型的な感情名詞と主語との意味的適合性

次に、感情名詞が否定的な感情名詞ではなく肯定的な感情を示す非典型的なパターンがある。このような事例に関しては、*strike fear into NP* パターンという典型例からの応用がみられないため、個々の事例に生起する名感情名詞の特性と主語の表す特性との関わりに注目したい。

主語の名詞と感情名詞との意味特性の関係を考察するにあたり、Pustejovsky (1995) において提唱されたクオリア構造を用いれば、名詞の意味構造が体系的に捉えられるため、有効であると考えられる。クオリア構造は、種類（人工物、自然など）の内的な属性を表す「形式役割」、材料や構成に関わる部分を表す「構成役割」、使用目的や機能を表す「目的役割」、そのものの成り立ちや原因となる動作を表す「主体役割」という4つの要素によって表示ができる (cf. 影山 1999, 小野 2005)。本稿では、非典型的な感情名詞が生起するパターンでの主語にあらわれる名詞句の特性について、クオリア構造の捉え方を適用して説明してみたい。

まず、BNC では、(12) に示す *pride and honour* を目的語とする事例が1例みつかると。この場合、主語が *anthem* であることによって理解可能となる。たとえば (13) のように、主語を *song* とすると一般的な音楽の概念として位置づけられる名詞であるため容認度が下がる。

- (12) I contrast this with the emotion and heart-wrenching sincerity with which the citizen of the United States salute their country as they sing the ‘Star Spangled Banner’, ‘God Bless America’, ‘America’ and other such anthems *which strike pride and honour into one's soul*. (BNC)

- (13) ??The song struck pride and honour into one's soul. (Nakao 2015)

(12) および (13) で示されるように、感情名詞句 *pride and honour* を目的語とする場合、主語 *anthem* との意味的な適合関係が必要であると考えられる。特に (12) で使用される *anthem* は、国歌の意味を示している。*anthem* は *song* の一種であるため、(14) のように動詞の目的語となる用法については、*song* との差はない。しかし、クオリア構造の概念を利用して国歌 *national anthem* を *x* とすると、目的役割 (=15)) の概念を示すことができ

る (議論に関係のない要素は省略)。したがって、主語 (national) anthem に特定の公的な場面で国の名誉や誇りを示すために歌うという機能や目的を含むため、感情 pride and honour との適合関係が捉えられる。

- (14) a. {compose/sing/play/perform/record/listen to} a song
b. {compose/sing/play/perform/record/listen to} a national anthem

(15) national anthem (x)

目的役割 : y sings x to show honor or pride of the county on special occasions

このように、名詞の持つ特性が感情を与える原因として意味的な適合関係が解釈される場合、典型的に示される否定的な感情名詞ではなくとも strike [Emotion Noun] into NP 構文の事例として生じることが可能であると考えられる。非典型的な感情名詞が生じる strike [Emotion Noun] into NP] が使用される場合、主語にみられる名詞句の意味情報の捉え方と感情名詞との密接な意味的な関係が重要な成立要因となっていると予測する。

次に、fear と類似する意味を示す panic が生起する事例 (16) に関しても、主語と感情名詞との意味的な適合性を考察する。(16) の例では、主語は they であり panic が生じる原因を示している。(16) での文脈から、they はテロリストが使用する missile を指示していることがわかる。また、panic との意味的な関係は missile の目的役割 (=17) の部分から捉えられる。兵器は人を攻撃して死傷させるだけでなく、拡張的に危険な状態にさせるものとみなし、恐怖やパニックの原因・対象としても理解され得る。

- (16) The missiles make ideal weapons for terrorists. They're small, easy to obscure and can be launched in a matter of seconds. But perhaps more importantly, they have the ability to **strike panic into** millions of people. (COCA)

(17) missile (x)

目的役割 : y uses x to attack people and threaten people

したがって、(18) の事例においては、主語 missile と突然の強い恐怖を表す panic との意味的な適合性が捉えられるために、strike [Emotion Noun] into NP 構文として使用可能であるとも考えられる。他の武器を示す語に関しても、(18) のように意味的な適合性から同様に生起できる。しかし、(19a) では table の意味には panic に関わる背景的な知識を引き出すことが困難であるため、容認度が下がると考えられる。つまり、table (x) の目的役割は、“y puts things on x”と解釈されるので、人の心理に働きかける関係性を捉えることはかなり難しいといえる。

- (18) {The shotguns / The newest weapons} struck panic into a lot of people.

(19) a.?? The table struck panic into a lot of people.

b. The book struck panic into me.

また、(19b) では (19a) と同様に一見 panic との意味的な関係を捉えられないようにみえる例であるが、容認される。(19b) の主語である book は、クオリア構造の概念を用いれば、information と physical object の両方を解釈できるとわかる (Pustejovsky 1995:149-51 参照)。

このような **book** の解釈を参照すると、(19b) の場合、**information** に **panic** を引き出す機能を含んでおり、**strike [Emotion Noun] into NP** 構文として解釈可能であると考えられる。つまり、**book** の目的役割は “y uses x to affect someone psychologically” と表示でき、引き起こされる感情の一つとして **panic** を解釈できるといえる。

次に、COCA でみられた肯定的な感情を表す名詞 **longing** が生じる例 (20) における主語にくる名詞 **bike** について考察する。この事例は、使用文脈により可能となっている例外的なものであると考えられる。この事例では、主語は **bike** のもつ複数の概念が関係している。一般に、**bike** (x) の目的役割は “y rides x” という乗り物の機能を表すことができる。しかし、(20) の例の場合には、語彙的に本来持つ意味ではなく、特定の使用場面で所有するものや購入するものを示し、商品 (**product**) として解釈可能である。つまり、感情名詞の意味に注目すると、**longing** は “a strong feeling of wanting something or someone (OALD)” を示し、**longing** の原因・対象となっている **product** としての **bike** が意味的に適合していると捉えられる。使用文脈から引き出される情報により、**bike** は (21) のように日常生活にあふれているさまざまな商品の下位カテゴリーとして理解されていると考えることも可能である。(cf. 影山 2005)。

(20) It might as legitimately be a bike you saw in a shop window last month that on the instant **struck a longing into** you that feels embarrassingly close to human want. (COCA)

(21) a. He bought a cool new racing bike. (LDOCE)

b. Not content with her new car, Selina now wants a bike. (LDOCE)

(20) の事例にみられる主語と感情名詞の意味的な適合関係は、文脈や背景知識を加味することで成立するといえる。しかし、この場合は特殊な使用例であり **bike** に文脈情報が付随しない限りは (22a) のように使用することが難しいようである²。また、(22b) のように、自然災害を示す名詞では、**product** のような **longing** の対象・原因となる事物としての解釈を引き出すことが困難な性質であるため、容認できない。

(22) a. ?The average-looking bike struck a longing into her.

b. *The tornado struck a longing into her.

このように、非典型的な **strike [Emotion Noun] into NP** 構文では、主語に生じる名詞の特性が感情の原因を引き出す機能・目的を表示できる解釈が認められるかどうか依存しているということがわかる。主語名詞のクオリア構造の目的役割の概念が、感情名詞との適合関係に作用していることが確認できた。

4. 上位レベルの構文スキーマにみられる一般的な特性の役割

この節では、主語と感情名詞との意味的な適合性が、上位レベルである使役移動構文の意味特性とどのように関係しているのかを考察する。そして、**strike [Emotion Noun] into NP**

² *strike a longing into NP* パターンは、Google の検索でも (20) と同じ実例を含む 2 例が検索された (2016 年 3 月 7 日検索)。

構文でみられた主語と感情名詞との意味的な適合性は、使役移動構文の上位レベルで捉えられる意味制約との対応関係があることを示す。

使役移動構文は、主語の働きかけによって目的語の移動が決定づけられなければならないという意味制約が先行研究で提示されている (cf. Goldberg 1995)。この性質から、使役移動構文は直接使役の特性を示しているという議論がされている。同様に、松本 (1997) は、語彙的に表現される場合では、主語と目的語である移動物はコントロールの関係でなければならないという使役と原因の条件を提示する。たとえば、(23) の目的語 **troops** と主語 **general** の社会的な背景を含む関係で見られる容認度の差で示されるように、主語の働きかけが目的語の移動を確実に決定づける関係であることが捉えられる必要がある。使役移動構文は、通常目的語が人間などであっても主語の働きかけによる移動が決定付けられる事態を表す。また、Boas (2003) で示される (24) の事例の対比では、主語と目的語の関係は同様の制約に基づいており、(24a, b) は目的語の移動を生じさせる力が不十分であるため容認度が下がり、(24c) の状況は世界知識として主語のもつ動力が目的語を移動させられることを想定できるため使用可能である。このように、さまざまな移動に関わる事態には世界知識及び背景知識が関係し、目的語を移動させる主な原因が主語に起因することが使役移動構文の特性として捉えられる。

(23) The general advanced the troops (??the enemy troops) to the front. (松本 1997)

(24) a. ?The baby blew the napkin off the table.

b. *The mouse blew the napkin off the table.

c. Lars blew the napkin off the table.

(Boas 2003)

以上の例から、使役移動を示す事態はさまざまな動詞や経路などの要素を含むため幅広いことがわかる。そこで、**strike [Emotion Noun] into NP** 構文の基となっている **strike** が生起する物理的な用法に限定して、主語と目的語との関係を捉えることにする。使役移動構文の一般的な特性が上位レベルの構文でも共通していると想定するならば、拡張用法である下位レベルの心理的变化を表す **strike [Emotion Noun] into NP** 構文においても、関連する特性が捉えられると考えられる。

(25) の例文は、それぞれ主語は動作主であるが、目的語は着点を通る刃物や刀剣類を示す名詞句が生起することができる。(25) とほぼ同じ事態を表す別の構文によって書き換えてみると、それぞれ (26) のように表すことができ、移動物にあたる名詞句は道具として表される。主語と目的語の関係は、目的語である移動物が道具とも解釈されているため、道具は主語による直接的な操作を受けることが解釈できる。(25) および (26) が示す事態では、主語と移動物の関係は一般的な使役移動構文での特性と共通し、主語の働きかけによって目的語の移動が決定付けられる。(25) の解釈より、**strike NP into NP** の物理的用法における主語は、目的語である刀剣の操作・移動を決定付ける要因であることが解釈できる。

- (25) a. The lumberjack struck his ax into the tree.
 b. The prince struck his sword into the dragon.
- (26) a. The lumberjack struck the tree with his ax.
 b. The prince struck the dragon with his sword.

つまり、物理的な用法 **strike NP into NP** 構文においても、主語と目的語の使役の関係は使役移動構文との共通した特性を示している。この構文から拡張された下位レベルの **strike [Emotion Noun] into NP** 構文においても 3 節で考察した主語と感情名詞との適合関係の必要性によって、使役移動構文の特性と部分的に対応付けられる。この場合、物理的な用法から抽象領域へと拡張して、主語が感情の変化を決定付けていると理解できる。したがって、使役移動構文 (=25) と **strike [Emotion Noun] into NP** 構文は、上位レベルの使役移動構文のスキーマと共通する意味的性質を示しており、構文間に対応関係を捉えられる。

5. 結語

本稿では、下位レベルの特異なパターンを「構文」と認定することにより、**strike [Emotion Noun] into NP** 構文の特性を 2 つの側面から考察した。

まず、構文の感情名詞の共起傾向に関して考察し、典型的なパターンの役割と非典型的なパターンに分類した。典型的なパターンについては、**fear** を伴う構文パターンが中心事例としての役割をみせ類似する否定的な感情を表す名詞の共起例が観察された。非典型的な感情名詞が共起するパターンでは、主語となる名詞の分析にクオリア構造の観点を部分的に示すことによって、感情名詞との意味的な適合関係を捉えることができた。

次に、主語と目的語の関係に注目し、**strike [Emotion Noun] into NP** 構文は上位レベルで捉えられる使役移動構文と体系的に関係づけられることを考察した。つまり、**strike [Emotion Noun] into NP** 構文の特性は、物理的な使役移動構文での主語と目的語の関係と対応付けられることを示した。

本稿では、動詞や名詞類が組み込まれた事例レベルでの構文を認定することにより、一般的な特性と語彙の慣用性の相互関係を捉えられることを示唆する。ただし、**strike [Emotion Noun] into NP** 構文における主語と感情名詞との意味的な適合性についての成立条件の提案に関しては、感情名詞の特性を含めたさらなる分析が必要とされるため今後の課題としたい。

参考文献

- Boas, Hans C. (2003) *A Constructional Approach to Resultatives*. CSLI Publications, Stanford.
- Bybee, Joan (2010) *Language, Usage and Cognition*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Croft, William (1991) *Syntactic Categories and Grammatical Relations: The Cognitive Organization of Information*, University of Chicago Press, Chicago.
- Croft, William (2003) “Lexical Rules vs. Constructions: A False Dichotomy,” *Motivation in*

- Language*, ed. by Hubert Cuyckens, Thomas Berg, René Dirven and Klaus-Uwe Panther, 49-68, John Benjamins, Amsterdam.
- Croft, William (2012) *Verbs: Aspect and Causal Structure*, Oxford University Press, Oxford.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, University of Chicago Press, Chicago.
- Goldberg, Adele E. (2006) *Constructions at Work*, Oxford University Press, Oxford.
- Iwata, Seizi (2008) *Locative Alternation: A Lexical-Constructional Approach*, John Benjamins, Amsterdam.
- 影山太郎 (1999) 『形態論と意味』くろしお出版, 東京.
- 影山太郎 (2005) 「辞書的知識と語用論的知識—語彙概念構造とクオリア構造の融合に向けて—」影山太郎 (編)『レキシコンフォーラム』No.1, 65-101, ひつじ書房, 東京.
- Kövecses, Zoltán (1990) *Emotion Concepts*, Springer-Verlag, New York.
- Langacker, Ronald W. (1990) *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*, Mouton de Gruyter, Berlin and New York.
- 松本曜 (1997) 「空間移動の言語表現とその拡張」田中茂範・松本曜 (編)『空間と移動の表現』第2部, 126-230, 研究社, 東京.
- Nakao, Tomoko (2015) *English Psychological Constructions: Semantic Interplay of Verbs, Nouns and Constructions*, Ph.D. dissertation, Osaka University.
- 小野尚之 (2005) 『生成語彙意味論』くろしお出版, 東京.
- Pustejovsky, James (1995) *Generative Lexicon*, MIT Press, Cambridge, MA.

コーパス : British National Corpus (BNC)

The Corpus of Contemporary American English (COCA)

辞書 : LDOCE: *Longman Dictionary of Contemporary English 5th Edition* (2009)

OALD: *Oxford Advanced Learner's Dictionary 8th Edition* (2010)

OED: *Oxford English Dictionary*